

# 帆 檣 成 林

—はんしょうせいりん—

## 「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。  
人が多く出入りする活気ある「みなと」を  
イメージしました。

## CONTENTS

特集1 大学との協力・連携の意義と課題 P.2~3

特集2 開墾の技術史 —蒲原平野のたんぼとはたけ— P.4

常設展示室から 新潟大火（昭和30年） P.5

おすすめの冊子 被災地の博物館に聞く  
—東日本大震災と歴史・文化資料— P.5

みなとびあ 明治・大正期のアマチュア写真 P.6  
研究notes

館長日記 ある水土の風景 P.7

収蔵資料紹介 西区赤塚地区採集石器群 P.7

博物館を支えるモノ・もの 可動式展示ケース P.8



ウォーターシャトルの「みなとびあ」乗船場

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース

帆檣成林

Vol.26

## 【たいけんのひろばプログラム】 楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申し込み・対象・参加費
8月11日 <sup>土</sup> ・12日 <sup>日</sup> 14:00~15:00	【むかしのあそび】 ストロー遊び	ストローを使って遊 びましょう。	不要 無料
8月18日 <sup>土</sup> 13:30~15:00	企画展関連プログラム 鉄をつかってみよう （*注1）	実際に鉄をつかっ てみましょう。	不要 小学生以上 無料
8月18日 <sup>土</sup> ・19日 <sup>日</sup> 14:00~15:00	【むかしのあそび】 竹とんぼ・紙ひこうき	竹とんぼや紙ひこ うきを作ります。	不要 無料
8月25日 <sup>土</sup> ・26日 <sup>日</sup> 14:00~15:30	ポンポン船を つくろう	ポンポンと音を鳴ら しながら動く船をつ くって遊びましょう。	不要 無料
9月8日 <sup>土</sup> ・9日 <sup>日</sup> 14:00~15:30	<sup>なかはな</sup> 高機で織ってみよう	高機をつかって布を 織ってみましょう。	不要 無料
9月15日 <sup>土</sup> 14:00~15:00	蓄音機を 使ってみよう	蓄音機でむかしのレ コードを聞いてみよ う。	不要 無料
9月22日 <sup>土</sup> ・23日 <sup>日</sup> 14:00~15:30	【むかしのあそび】 折り紙であそぼう	折り紙でいろいろな ものを折って遊びま しょう。	不要 無料

水と土の芸術祭 市民プロジェクト 【水と土の文化祭】	
9月16日 <sup>日</sup> 9:30~ 14:00	第3回 みなとびあで絵を描こう みなとびあ敷地で写生会を おこないます。（*注2）
9月30日 <sup>日</sup> 10:00~ 15:00	みなとびあフェスティバル2012 塔屋見学やたいけんプログラム など、イベント盛りだくさん!!

お申込みは、お名前・連絡先電話番号を記載の上、電  
子メール・往復はがきで当館まで。締切は必着です。  
プログラムは予定となっておりますので、詳細は当館  
までお問い合わせください。

（\*注1）会場は、新潟市文化財センター（まいぶん  
ポート）です。直接会場へお越しください。  
（雨天中止）

（\*注2）参加希望の方は、はがき・電子メール・  
FAXにて当館までお申し込みください。  
当日参加も受け付けます。

## 現在開催中 企画展 開墾の技術史 —蒲原平野のたんぼとはたけ—

新潟市域を含む蒲原平野の開墾の技術に焦点をあてて、考古学や歴史学、民俗学などそれぞれの分野の研究成果  
を示し、さらにいまだ明らかになっていない課題についてわかりやすく紹介します。

【会 期】2012年7月21日（土）～8月26日（日）

【休館日】7/23（月）・30（月）・8/6（月）・20（月）

観覧料	一般	600円（480円）	（ ）は団体料金
	高校生・大学生	400円（320円）	*小・中学生は土日祝日無料
	小学生・中学生	200円（160円）	*企画展示観覧券で常設展示 も御覧いただけます

### 関連イベント

#### (1) ギャラリートーク

【日時】毎週日曜日  
午後1時半から開催  
(8月19日のみ15時半から)  
■費用：無料  
(別途観覧券が必要)  
■申込：不要

#### (2) 講演会

##### 日本農業史における開墾

【日時】8月19日（日）13:30~15:00  
【講師】木村茂光氏（歴史学者 帝京大学教授）  
【会場】みなとびあ2階 セミナー室  
■募集人数：80人 ■資料代：100円  
■申込締切：8月3日（金）まで  
■講演会終了後、講師と企画展観覧券（別途観覧券が必要）  
\*【申込方法】往復ハガキか電子メールにて、①氏名、②住所、  
③連絡先電話番号を記入の上、お申し込みください。応募者  
多数の場合は抽選いたします。

#### (3) 体験プログラム

##### くわ 鉄を使ってみよう

【日時】8月18日（土）13:30~15:00  
\*雨天中止  
【集合場所】  
新潟市文化財センター  
(まいぶんポート)  
※現地集合。詳しくは  
お問い合わせください。  
■対象：小学生以上  
■申込：不要

### 博物館 講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、  
毎月第4日曜日にお話します。  
時間：13:30~15:00 会場：本館2階セミナー室  
申込：不要。当日受付、定員50人程度 資料代：100円

- 7月の講座：7月22日（日）  
「新潟湊と廻船」 講師：伊東 祐之
- 8月の講座：8月26日（日）  
「新潟奉行川村修就による裁きについての一考察」 講師：若崎 敦朗
- 9月の講座：9月23日（日）  
「新発田藩領の大庄屋制」 講師：安宅 俊介

### 博物館を支えるモノ・もの 可動式展示ケース

みなとびあの企画展示室には備え付けの壁面展示ケースに加えて、可動式展  
示ケースがあります。背が低くのぞき込むタイプのもの、幅と高さが2.7mある大  
型ケース、四面ガラス張りの行灯型の3種類で、資料の見せ方で使い分けていま  
す。これらは外気に左右されないよう、気密性を  
高めています。さらに、資料を安全に展示するた  
め免震構造になっています。また、資料に効果的  
な照明を施すため、光ファイバー照明装置付きの  
ケースもあります。  
展示会ではこれらを使ってさまざまな資料を展  
示するとともに、展示室全体における展示ケース  
の配置を考え、魅力ある空間を作り出しています。



### 次回 企画展

第9回むかしのくらし展  
「むかしのくらし・きほんの道具」  
高度経済成長以前のくらしを支えていた、衣食住の  
「きほんの道具」を紹介し、現在身の回りにある道具  
との違いを考えます。

【会 期】2012年9月15日（土）～12月16日（日）  
【休館日】9/18（火）・24（月）・25（火）  
10/1（月）・9（火）・15（月）・22（月）・29（月）  
11/5（月）・6（火）・12（月）・19（月）・26（月）・27（火）  
12/3（月）・10（月）  
【観覧料】無料 \*常設展の観覧は有料です  
\*「相国寺・承天閣美術館コレクション展」(9月29日(土)～  
11月25日(日))は、別途観覧料が必要となります

編集 後記 「帆檣成林」第26号はいかがでした  
でしょうか。今回の特集では、企画展に関す  
る内容に加えて、「大学との連携」について取り上げました。普段の  
活動の中ではあまり一般の目に触れることのない部分ですが、興味  
を持っていただければと思います。さて、いよいよ蒸し暑い季節と  
なりました。夏の間、当館では企画展を開催しておりますので、涼み  
がてらみなとびあへお越しください。皆さまのご来館をお待ちして  
おります。(並木)

■お問い合わせ・申込みは博物館まで・・・  
新潟市歴史博物館 みなとびあ  
住所：〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
TEL:025-225-6111 fax:025-225-6130  
E-MAIL:museum@nchm.jp  
休館日：毎週月曜日、祝日の翌日 開館時間：9:30~18:00



帆檣成林「はんしょうせいりん」第26号  
編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
印刷／株式会社博進堂 ■発行日 平成24年7月20日



# 大学との協力・連携の意義と課題

伊東 祐之

新潟市歴史博物館と大学との連携・交流について考えるといくつかの側面があると思います。まずは、当館の設置目的の一つである「歴史を媒介とした市民交流」の一部であるということ、次に教育機関としての大学との関係では、大学における人材育成への協力、あるいは大学生の文化財保護や博物館への理解を深める教育の推進ということ、また、研究機関としての

平成二十一年（二〇〇九）年、当館は「ハル濱金代文化展—十二世紀の中国、北方の民族が建国する—」という企画展を開催しました。これは新潟市とハルビン市との友好都市提携三十周年を記念して、新潟市が提案し当館が独自

夫教授・飯島康夫准教授でした。両氏は、博物館学芸員として大先輩にあたり、開館時には多忙を極める当館学芸員のために陣中見舞いに来館していただきました。その両氏から新潟大学で博物館学芸員を志す学生に、館運営の現場にいる学芸員から、机上の理屈ではなく具体的な事例によって博物館論を講義してほしいとの依頼を受けて開講しました。「博物館学概論」受講済みの学生を対象に、後期に十三回五コマ分二単位の講義です。学生数は年によって多少があり二〇〜四〇人ほどで、人文学部・教育学部・理学部などの所属でほとんどが三年生です。学芸員が交代で調査研究や資料保存、展示製作、教育普及活動など、様々な館活動について話しています。その内容は学芸員によって差はありますが、実態をかなり赤裸々に述べていて、当館がめざしていることと同時に、実現できていないことや問題点なども話しています。授業の最後には毎回、受講票を記入してもらっていて、それには学生の質問や感想が記されています。その辛辣な指摘に講義内容の不十分さを知ったり、建設的な提言に館のあり方を考えたり、新たなヒントを得たりしています。この授業で当館の学芸員は、学生から様々なことを学んでいますし、講義することを通じて、館の運営や自分の活動を検証する機会となっ

に企画・実現した事業で、ハルビン市の金上京歴史博物館の所蔵品を借用し展示しました。当館には金の歴史はもちろん、中国史を専攻する学芸員もいませんが、担当者は、金など中国史関係の文献を読み、金上京歴史博物館へ足を運んで学芸員の話聞き、所蔵資料を調査し、どうすれば金の建国と女真について日本に伝えることができるのか、どうすれば金上京歴史博物館の仕事をよりの確に紹介できるのか考えました。しかし、限られた期間では限界があります。そこで事業を進めるために新潟大学人文学部東洋文化史研究室に相談し、同大超域研究機構（現研究推進機構超域学術院）准教授佐藤貴保氏を紹介していただきました。佐藤准教授には、企画展内容についての助言や関連した講演、図録の原稿執筆だけでなく、全国の金史の研究者が集まる「遼金西夏史研究会」を、新潟市で企画展に合わせて開催していただき、当館は同会と共に市民向けのシンポジウムを開催することができました。当館が大学の協力を仰いで行った事業の一例です。

ています。

しかし、当館の調査研究や企画展示を深める専門的研究の面では、大学研究者と協力・連携する活動は低調です。当館が明らかにすべき調査研究の課題あるいは展示や教育普及活動などについて大学研究者と共同研究したり、監修を受けたり、助言を受けたりするような協力・連携はほとんどありません。今まで行われてきた調査研究面での協力も、臨機で場当たりのものがほとんどであり、計画的な事業となっていない。

この原因には、大学と博物館という機関の目的・方法・性格が異なること



当館でのミュージアム論講義

館員の個人的なつながりもあって、当館は特に新潟大学と様々な協力・連携活動を行ってきましたが、ここでは他大学との協力・連携もふくめて列挙してみよう。

開館前でしたが、新潟大学人文学部の民俗学実習の授業で、学生に当館が引き継ぐことになっていた新潟市郷土資料館所蔵資料の付票付け替えを、当館学芸員とともにしました。当館の資料管理の基礎となっていた仕事でした。開館後には、それぞれの専門研究の成果を、新潟大学・新潟県立短期大学（現新潟県立大学）などで講義している学芸員もいますし、当館で講義を担当している授業もあります（後述）。

また、長岡造形大学や新潟大学では、当館の展示や施設・建築などを見学する授業も毎年行われています。全国の大学での博物館学や都市計画などの講義で、当館の展示や資料を調査してレポートを仕上げる課題が学生に与えられ、学芸員や司書が学生に対応することもあります。学芸員資格取得に必要な館務実習は、毎月一回二日間通年で行う実習と、夏季休暇中に二週間

個別の研究者と研究課題を深めて専門的な研究をするというよりも、多くの

人々との交流の材料となる事柄について広く調査することの方が優先されてしまおうという問題があります。また、直近や一年後の担当企画展の調査研究・展示準備に追われ、大学研究者と共同課題を見出すような日常的な共同の資料調査や資料検討会、研究会などを組むことができないのです。

これらの課題の克服は必要です。当面は、互いの調査研究の成果を公表し合って、その中からそれぞれの関心から汲み取るべきことを汲み取る作業が大切です。そこで共同調査・研究ができる素材が見出せたらそれを一緒に育



遼金西夏研究会との共催シンポジウム

行う実習の二種類で、全国の大学生を受け入れています。

自治体史や既存の図書で紹介されている当館の所蔵する資料を手掛かりに、資料の閲覧・複写する大学研究者がいます。大学研究者の紹介で資料が当館に寄贈されたこともありますし、美術資料の購入にあたり大学研究者に作品を検討してもらったこともありま

新潟大学が中心となって組織した新潟歴史資料救済ネットワークの活動に当館もかかわってきましたが、昨年の震災に際しては新潟大学が実施した文化財レスキューに当館学芸員が参加しました（「帆橋成林」25参照）。

このような協力・連携のなかでも、当館が新潟大学で開講している「ミュージアム論」という授業は、当館にとっても大きな役割を持っていました。館を指定管理者として運営する新潟市芸術文化振興財団が新潟大学人文学部へ寄附する講座という形式で、平成十八（二〇〇六）年以来、新潟大学で開講しています。この寄附講座を提案してくださったのは人文学部の池田哲

ていく活動ができると思います。そのためには、研究成果を論文として公表している大学研究者から一方的に成果を受け取るだけでなく、博物館も館の学芸員もその所蔵資料や日常的な調査研究の成果を広く情報発信して、大学研究者はもちろん多くの市民に知ってもらい、その成果をもとに交流していく必要があります。そうすることで個人的なつながりに頼らず、新潟大学以外の大学研究者とのつながりも深まると思われます。

みなとびあが大学との協力連携を一層進めるためには、当館の調査研究活動を盛んにするとともにその成果を広く公開してゆくことが必要です。基礎となる資料の収集保存や調査研究、展示、情報集積と発信など館の主体的な活動の充実を図ることが、館を協力・連携・交流の場として発展させる基礎なのです。ここでは大学との協力・連携を例に考えましたが、当館の設置目的である「歴史を媒介とした市民の交流」をより発展させるためには、「新潟市域の歴史的特性を明らかに」するという設置目的を実現する、みなとびあがの主体的活動の充実が不可欠なのです。

（いとう すけゆき 副館長兼学芸課長）



# 開墾の技術史

岩野 邦康

今回の企画展では、たんぼ・はたけを造成する「開墾」に関わる技術に注目し、考古学、歴史学、民俗学の研究成果にもとづいて、現時点で明らかになっている蒲原平野の最新の歴史像と、これから解明が期待される問題の所在について紹介します。

## 蒲原平野の原風景の再検討

越後平野のうち、かつて蒲原郡に属していた新潟市を含む地域は、蒲原平野と呼ばれます。中世以前の蒲原平野は、従来、大小の無数の潟と河川からなる広大な低湿地がひろがる景観であったと考えられていました。人の手の入っていないこの原野を舞台として、近世期に新田開発が盛んになり、多くの村が成立したという流れが、この地域の歴史を考える際の基盤となっていました。

しかし、古代〜中世の水田遺構をとともなう、大沢谷内遺跡(新潟市秋葉区)、小坂居付遺跡(新潟市南区)などの遺跡が近年発見され、蒲原平野の歴史は再検討を迫られています。小坂居付遺跡では、近世の新田開発を裏付ける近世以後の水田耕作土の下に、湯やヤチ(低湿地の原野)であったことを示すガツボ層(植物の腐植土層)があ

り、さらにその下に中世の水田の耕作土がありました。

このことは、近世初期に湯やヤチであった場所が、中世以前に水田であったことを示しています。これらの水田は、なんらかの原因で放棄され、湯や原野に戻っていったようです。これらの発見は、江戸時代初期に製作された正保国絵図に描かれた蒲原平野の状況が、中世末〜近世初期の限られた時期の様子を描いたものである可能性を示しています。

## 出土した田下駄と民具として収集された田下駄を比較する

さきほど紹介した遺跡からは、水田で使用する履き物「田下駄」だと考えられている木製品が出土しています。その特徴は、足を乗せる側の面に、かかとを収めるU字型の枠がある点です。U字型の枠をもつ田下駄は、近代の土地改良事業が進展する

まで、福島県の猪苗代湖周辺や、静岡県沼津市浮島ヶ原周辺で「ナンバ」とい



馬場屋敷遺跡で出土した田下駄(新潟市文化財センター提供)

う名称で使用されてきました。

蒲原平野で中世の層から出土する田下駄の多くは「ナンバ」型です。しかし、この地域で土地改良以前の農業で使われていた田下駄は、棒や板を組み合わせた、わら縄の鼻緒などで足を固定する「カンジキ」型の田下駄です。「ナンバ」型の民俗資料は確認されていません。

蒲原平野の異なる時代の水田稲作の道具として「ナンバ」型と「カンジキ」型という二種類の田下駄が存在していることは、二つの時代で、それぞれ異なる技術を用いた稲作が普及していたことを示しています。

## 原野の特徴と開墾具

近世初期にヤチ状態の原野を開墾し、新田村を成り立たせていったことは、領主が開墾を認める開発免許状が多数残っていることから確かめられています。また、平野各地の旧家に伝わる開発伝承も、この時期に開墾が盛んであったことのひとつの裏付けとなっています。しかし、新田開発の初期の段階で、どのような開墾技術が用いられていたのかはよくわかっていません。

現在、蒲原平野の各地の博物館・資料館が収集保存している農具には、トウゲ

ワ(唐鋏)、マドグワ(窓鋏)、ヤチキリガマ(ヤチ切り鎌)などの開墾具があります。これらのうち、トウゲ



ヤチキリガマ(当館所蔵)

ワは、土地の形状に関わらず山林や原野、荒地などを開墾する道具として一般的でした。一方、マドグワやヤチキリガマは、ヤチなどの低湿地の開墾に特化した道具で、低湿地に密生しているヨシ(アシ)の根茎層を切断して耕起することに適した構造をもっています。とくに、ヤチキリガマは、蒲原平野以外の平野部ではあまり用いられなかった、この地域特有の開墾具であることが見えてきました。これらの道具がいつ頃普及したのか、蒲原平野のたんぼやはたけの歴史を考える上で、大きな鍵になります。

今回の企画展をご覧になった方が、いまままで考えていた蒲原平野の歴史像を再検討し、まだ解明されない問題を含めて、地域の歴史により関心を深めてもらえたら幸いです。(いわの くにやす 学芸員)

## 常設展示室から

# 新潟大火(昭和30年)

昭和30(1955)年10月1日午前2時50分頃、県庁第三分館(医学町通)から火の手があがりました。この日の新潟市の大気は、日本海上の台風22号のフェーン現象による乾燥状態にありました。

折からの強風に煽られ、火は新潟市の中心街へひろがりました。焼失面積7万8000坪、被災戸数972戸、被災人員5901名。出火原因は漏電によるものとされています。



当展示コーナーに設置してある装置では、ラジオ新潟・丹羽国夫アナウンサーによる火災のラジオ実況放送の音声を聴くことができます。実況は、眼下に炎が迫り来る中、当時ラジオ新潟本社があった大和デパート7階の屋上から午前4時30分に始められました。この時、丹羽アナウンサーは、屋上に吹きつける強風で体が飛ばされないように、コードで全身を鉄柵に縛りつけて実況していたといえます。実況は「え?小林\*から火がついた?」という、思わず漏れ出た言葉の直後に打ち切られました。大和デパートが炎上する15分前のことでした。

この大火を期に新潟市は、防火都市をめざしていきます。

\*大和デパートの斜向かいにあった小林デパートのこと。現在の新潟三越(西堀通五番町)の場所。

安宅 俊介(あたか しゅんすけ 学芸員)

常設展示室パネルより



東中通付近の様子(山際三蔵氏撮影)



火災直後の西堀(野口昭範氏撮影)

## おすすめの1冊

### 被災地の博物館に聞く

—東日本大震災と歴史・文化資料—

本書は、岩手・宮城・福島県の博物館職員が、東日本大震災で被災した歴史・文化資料を救出・保全する活動を報告したものです。報告から大震災による歴史・文化資料の被害の大きさ、深刻さを知ることができます。

地域の歴史・文化を知ることができるのは、その地域に膨大な数の古文書や民具等が伝えられているからです。しかし、地震と津波により多くの資料が失われました。水損し汚泥に塗れた資料は、一刻も早く救出し、処置することが必要でした。

本書は、二〇一一年七月三十日に国立歴史民俗博物館の呼びかけで開催された特別集会の報告をまとめたものです。震災発生から約四ヶ月後、被災地の過酷な状況下での、膨大な数の被災資料の劣化を防ぐための模索と苦闘のただ中からの報告です。冷静な語り口で伝えられる現場の状況に息をのむと同時に、困難な状況の中でのひたむきな活動に地域における歴史・文化資料の意味の大きさを改めて感じます。

(森 行人 学芸員)



国立歴史民俗博物館 編  
吉川弘文館  
2012年



# 明治・大正期のアマチュア写真

明治時代初頭、新潟ではすでに写真の撮影が行われていましたが、その技術が芸術表現の手段とみなされるようになるのは後年のことです。

東京では写真の芸術性を求めた団体〈ゆふつ社〉が明治三十七(一九〇四)年に結成され、同年大阪で〈浪華写真倶楽部〉がうまれました。明治四十(一九〇七)年に〈東京写真研究会〉が設立されると、これならって地方各地にアマチュアの同好会が誕生しました。全国の会を結んでいたのは雑誌でした。『写真月報』(東京写真月報社)や『写真界』(大阪桑田商会)などの投稿欄が、情報交換の機能を担ったのです。

新潟県では長岡町で歯科医院を開業していた石塚三郎が先駆的な活動を展開しました。明治三十六(一九〇三)年に〈北越写真友会〉を起こし、これに続いた〈高田写真友会〉、〈新潟写真会〉の先輩として指導的役割を果たしました。これら県内の団体もゆるやかにつながっていました。主要なメンバーが重複して会員になっていたのです。特に写真館を経営する朝倉金作、写真器材商の会金次郎といった業界関係者が新潟・長岡の双方に顔を出していたことは注目されます。材料調達と技術指導で県内のグルー

プを幅広く支えていたのです。

新潟市では明治四十(一九〇八)年創立の〈新潟写真会〉に続き、四十四(一九一一年)年には小規模なグループ〈可良栖会〉も結成されます。物産陳列館で行われた同会の展覧会には二日間、一万人が詰めかけたと言われ、写真趣味への関心の高さをうかがえます。ただ、多くの人たちにとって写真は高嶺の花でした。明治四十(一九〇七)年発行の『写真機械材料目録』(浅沼商会)によれば、レンズ一個で数十円、一枚のキャビネ乾板が一円強でした。器材商にとって、経済的ゆとりがあった同好の会は重要な得意先だったでしょう。

明治末の写真趣味は大正時代にも引き継がれました。大正七(一九一八)年



物産陳列館で開かれた県内写真同好会の連合展  
(『新潟新聞』大正7年10月13日)

には〈新潟写真会〉から〈紫光会〉が独立し、また十(一九二二)年には〈赤窓会〉が競技会を行っています。〈紫光会〉の中心メンバーは鍵富健作、安藤文平といった事業家たちで、〈赤窓会〉には長谷川寛、竹山七郎といった法曹・医学界の若手が参加していました。

さて、これら明治・大正期のアマチュア写真家たちはどんな写真を撮っていたのでしょうか。残念ながら実物の作品はほとんど残されていませんが、ただ、かれらが「絵画のような写真」をめざしていたことは確かです。今日ピクトリアリズム(絵画主義)とよばれる全国的な芸術写真の潮流です。

新潟の愛好家たちが追従したのも、まぎれもなく絵画主義でした。たとえば〈可良栖会〉の展覧会でも、オイルプリント、プロムオイル、ガムプリントといったピグメント印画が花形でした。油絵の具を使って像を現す古典的な技法です。一枚一枚が手作りのため、まるで絵画のようなやわらかい調子が得られたのです。写真というより版画に近い作業だったでしょう。

撮影される対象にも特徴が見られます。机上の静物、花をもつ少女など、絵画の主題にありがちな「演じられた」モ



鍵富健作旧蔵のプロムオイルプリント  
(大正時代、個人蔵)

木村 一貫

チーフを仕立てたのです。〈可良栖会〉を評した当時の新聞記事は、いかにも絵画に近い作品をミレーの油彩画にたとえ、「毫も写真臭ひところがない」と賞しています。

絵画主義の流行には様々な要因が指摘できますが、少なくとも高価で手間のかかる環境が写真を職人的世界にとどめたことは確かでしょう。やがて国産フィルムが流通し、カメラが小型化すると、写真は絵画と決別します。第二次世界大戦が終わり、アマチュア写真家たちは再びカメラを持ち歩きます。「絶対非演出」(土門拳)に駆られたリアリズム写真を求めていったのです。

(きむら ひとやす 学芸員)

## 館長日記

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二

### ある水土の風景

ギンヤンマというトンボをご存じでしょうか。オニヤンマのように大きく、素早く高く飛び、雄のおなかはきれいな空色で雌は目立つえんじ色をしていました。半世紀前には、稲刈りが終わったばかりで水が溜まったままの新潟市近郊の田んぼにはこのヤンマが野地を越えて番って飛んできたものでした。

小学校高学年の男の子たちは、その雌を捕まえてたくて網をもってその番ったヤンマを追いかけたものでした。番ったヤンマは、刈り残った田んぼの稲などに小休止して雌が卵を水中に産み落とす。そのため子供たちは追いつくことができたのです。

いつも一緒に遊んだのはこの時、抜き足差し足で近寄って、失敗もしますが、時々捕まえたものでした。しかし私が同じように近づくと、あと一歩のところ番いのヤンマはいつも飛び立ってしまっただけでした。



みなとぴあ常設展示室 稲木の展示

ら動くともなくゆっくりゆっくりと近づくとコッとして、あと五センチほどのところで、素早くかぶせるんですよ」とおっしゃって、年来の疑問がやっと解けたのです。

そうだ！新潟市歴史博物館の常設展には、秋空に実った稲、水の張った田んぼで稲を刈る農家の人たちが、刈った稲を乗せた田舟、舟を通す堀や土手、ハサ木が並んだ新潟近郊の景観が見事に復元されています。残念ながらヤンマは飛んでいませんが、かわりに赤トンボが飛んでいます。ぜひ探してみてください。

### 収蔵資料紹介

#### 西区赤塚地区採集石器群

西区赤塚に所在する御手洗濁北岸の砂丘上で採集された石器が、市民の方から昨年当館に寄贈されました。実は、みなとぴあで所蔵する考古資料はごくわずかで、常設展示室で紹介している資料のすべてが借用品です。このたび、この石器の寄贈により、当館の収蔵品に考古資料が加わりました。

石器は計三十九点で、すべて狩猟用の道具です。これらの石器が使われた時代は縄文から弥生時代の広い範囲が想定され、土器など時期を特定する資料は採取されていません。主な種類として、石鏃と石匙があります。石鏃は矢の先端に取り付けて使用する弓矢の道具で、石匙はその形状から付けられた名前ですが、本来はナイフなどの刃物の役目をします。石匙は特つた獲物の解体などに用いられました。また、ヒモをかけるためのつまみが付いていることが特徴で、おそらく腰などにぶら下げて携帯していたのでしょう。

採集品の中には、石鏃の根元の部分や石匙のつまみの部分に天然アスファルトが付着しているものがあります。アスファルトは接着剤としての役目を持ち、石鏃と矢柄、石匙とヒモとの結合を強化するために用いら



西区赤塚地区採集石器群の一部  
(左下)石匙、(右下)アメリカ式石鏃

れました。なお、特徴的な石器として根元の部分が横に広がる石鏃があります。これはアメリカ先住民が使用していた石鏃に形が似ていることからアメリカ式石鏃と呼ばれ、主に東北部の弥生時代の遺跡から出土しています。

なお、このほかにも弥生時代の石鏃が含まれているようです。弥生時代後期の西区の六地山遺跡からもアメリカ式石鏃に混じって多くの石鏃が出土しています。米づくりが伝わった弥生時代でも、このあたりでは縄文時代以来の狩猟が盛んだったようです。

石器の採集地点は、当時も砂丘と濁などの水辺による地形であったと考えられます。水辺には鳥や小動物が集まってきたことでしょう。土器の採集がないことから、この地は定住の場所ではなく、狩猟など生産活動の場であったと考えられます。

(小林 隆幸 学芸員)